

伝統知シンポジウム

「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」

要旨集

日時：2017年4月15～16日（土日）1泊2日

場所：神奈川県相模原市緑区、藤野地区の「篠原の里」ほか

伝統知シンポジウム

「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」

日時：2017年4月15～16日（土日）1泊2日

場所：神奈川県相模原市緑区、藤野地区の「篠原の里」ほか。

主催：自然文化誌研究会、エコプラス

共催：エコミュージアム日本村（トランジション小菅）／ミューゼス研究会、トランジション・タウン藤野、トランジション・ジャパン

協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、農業生産法人藤野倶楽部、藤野観光協会

助成：「緑と水の森林ファンド」事業（国土緑化推進機構）

連絡問い合わせ先：黒澤友彦 npo-inch@wine.plala.or.jp または木俣美樹男 kibi20kijin@yahoo.co.jp

伝統知研究会委員：中込卓男（自然文化誌研究会代表理事）、中込貴芳（同副代表理事）、黒澤友彦（同事務局長）、小柳知代（東京学芸大学講師）、藤盛礼恵（東京学芸大学非常勤講師）、木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授）、高野孝子（早稲田大学教授）、大前純一（エコプラス事務局長）、阿部勉（森とむらの会）

プログラム：

4月15日（土）

9：30～ 受付

10：00～10：10 挨拶・総合司会 中込卓男さん（自然文化誌研究会代表理事）

10：10～10：40 基調報告

高野孝子さん（早稲田大学教授）

伝統知を生かした交流と学びの場

10：40～11：40 伝統知研究会報告

大前純一さん（エコプラス事務局長、新潟県南魚沼）

苦役を学びに

黒澤友彦さん（自然文化誌研究会事務局長、山梨県小菅村）

伝統知～知恵と効率化

11：40～13：00 昼食、ポスター・セッション

13：00～14：30 話題提供

設楽清和さん（パーマカルチャー・センター代表）

新たな持続可能な文化の生成について

高橋靖典さん（トランジション・タウン藤野、藤野倶楽部）

境界のまち「藤野」の社会的な価値

渡辺隆一さん（信州大学特任教授）

信州の自然と農と教育

14：30～14：45 休憩

14：45～17：00 座談会風の総合討論

司会 中込貴芳さん（自然文化誌研究会副代表理事）

*休憩 10 分含む

17：30～ 交流会（夕食懇親会）

4月16日（日）

9：00～10：00 シンポジウムのまとめと藤野まち歩きを紹介

司会 末村成生さん（トランジション・タウン藤野）

10：00～12：00 藤野サスティナブル・スポット・ツアー

藤野という里山地域に根づきつつある持続可能で身の丈に合った暮らし。その具体的な営みを体感できるスポットをぶらっと見学してみませんか。パーマカルチャーやトランジション・タウンの実践現場をご案内します。

13：00頃 藤野駅で解散あるいは希望者は藤野倶楽部・百姓の台所で昼食後解散

趣旨：

日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には現代的にも高い価値があり、「持続可能な社会づくり」には不可欠であることが明らかになってきている。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会が極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。本事業では、3年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。

本シンポジウムでは事業成果を報告し、さらにこの成果を社会的に位置づけるために他の先進事例も紹介し、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による、健全なライフスタイルについて、農山村と都市からの参加者ともにゆったりと話し合いたい。

幸いなことに、開催地の藤野は日本のトランジション・タウン活動の中心であり、シュタイナー学校やパーマカルチャー・センターもある。素のままの美しい暮らし（sobibo）へとライフスタイルを変容するために学ぶための良い実践が蓄積されている。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念をともに発見し合いたい。

（副題：現代文明の移行と伝統知・生業～第39回環境学習セミナー）



伝統知を生かした交流と学びの場

高野孝子（早稲田大学教授）

日本の農山村の多くでは、自然から持続的に恵みを取り出す知恵や、自然に近い生活から生まれる哲学や洞察が長年受け継がれてきた。近年、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化に伴い、そうした伝統知やライフスタイルそのものが、集落や人々とともに消えようとしている。

自然文化誌研究会とエコプラスを中心とした調査研究チームは、何百年と暮らしを維持してきた集落の技や知識には、「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることを前提として、都市と農村住民の交流プログラムを実施し、過去3年に渡ってデータを収集した。

それは、単なる「自然体験」ではなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流であった。そうした機会を通して、参加者が伝統知についてどのような価値を見出したか、都市であれ農村であれ、持続可能な社会づくりの手がかりとなるかを考察した。

ここでは研究会の全体の報告として、幾つかのプログラムならびに調査結果の概要を報告し、見えてきた課題と可能性について言及する。



苦役を学びに

大前純一（NPO 法人エコプラス 事務局長）

私たちが活動をさせていただく新潟県南魚沼市の山里は、4mを越す雪が積もる豪雪地帯である。毎朝のように玄関前に腰までの雪が積もり、その除雪だけでもくたびれる。夏場、山の斜面に広がる美しい棚田は、田んぼよりもあぜの傾斜面の面積の方が広いといわれ、村人は6月から9月まで、あぜの草刈りに追われる。どちらも「苦役」でしかない。その雪掘りは都会の人間からすると、スキーとはまったく違ったアクティビティになる。草刈りで絵文字を描けば「草刈りアート」だ。参加者は、体を動かし、蓄積した技を教わり、人々が何百年にもわたって積み重ねてきた暮らしを学ぶ。そこから改めて都市化し近代化した私たちの暮らしを見つめ直し、持続可能な未来を考える。わずか数十年しか経ていないいまの私たちの暮らしの姿をよりよくするために、改めて足もとを見直すときだ。



伝統知～知恵と効率化

黒澤友彦（NPO 法人自然文化誌研究会 事務局長）

「知恵」は身に付けることであると思う。小菅村に移住して12年、豊かな自然と文化、伝統的な知恵に囲まれているという実感があり、訪れる人もそう言う。自分の日常を考えると、「生業」をこなしながら暮らしている＝職業である案内人だけでなく、プレイヤーという側面もあり、正直、田舎暮らしもなかなか忙しい。だが、自分自身がプレイヤーであり、身の丈に合った部分をこなしていくことは回数を重ねるごとに自信を生み出すものでもあると思う。

自分の「生業」に関して本音を言えば、実は楽しみではない、早く片付けたいと思っているのが「生業」であったりもする。

私個人の日常で言えば「生業」はこんなところ。

- ・薪割り（薪ストーブ燃料）～チェーンソー、斧の活用、保存方法、冬支度
- ・畑作～生鮮食品、穀物類の確保
- ・狩猟（趣味と義務）～山を知ること、解体作業、蛋白源の確保。副次的に、有害鳥獣駆除による森林の保全（側）

日常生活の中で大きく3つの生業を常に抱えており、これは自分自身と自然とをつなぐ接着剤。同時に、楽しみというよりはなるべく作業を効率化することにより、熟練度が上がり、余暇が増える。仕事と捉えずに、仕事の合間に、日常の合間にて行うこと。すべてに共通することは、肉体を活用することと、自然と関わることなので、健康維持という側面も持っている。健康維持を考えれば、自動的に肉体を鍛え維持すること、効率化を常に回り頭を働かせるということで知恵を磨けるという環境＝システムに包まれている。実は生業によって、伝統的な知恵の習得がなされている訳で、感謝すべきものであるということが、自然への感謝の気持ちであろうか。

想定外の災害や、未曾有の自然災害が起きる可能性のある中、伝統的な知恵を身に付けておくことは必須であると思う。小菅村のような山村にいる限り、電気が止まろうとも、ガスがなかろうとも、命をつなぐことは可能だと思う。自分自身の手の届く範囲にエネルギーや食材が存在するからだ。農山村の伝統的な知恵を継承することや学ぶことは、農山村の維持のためではなく、生きていくための知恵を学べる場所として、ぜひ活用していただくのが農山村と都市の双方にとって良いのだろう。そしてそのようなプログラムをこれまでに展開してきた。

日常的にかかわる全ての伝統知をやりきることは難しいので、個人で必要な知恵を考え、厳選していく必要もあるだろう。



信州の自然と農と教育

渡辺隆一（信州大学教育学部）

「みすず刈る信濃」といわれる長野県は日本の屋根である。県歌、信濃の国に詠われているように4つの平らに住む人々は豊かな自然に恵まれ農業も盛んで、豊かな自然を背景に農を基本とした多様な山村文化が各地に見られた。長野市の近郊でも、戸隠村は神社信仰とそばが、鬼無里村では麻や雑穀の栽培が盛んであり、ブナの森に囲まれた野沢温泉村では正月にブナのやぐらを組んだ盛大な火祭りが今でも行われている。

しかし、現代社会はこの信州においても経済発展が主題であり、自然へのまなざしは極めて少ない。私たちの生活は表面的には金銭の経済であるが、深層では地域の自然や文化を土台にしているのであり、それらを踏まえずには「持続可能な社会・地域」は成立し得ない。世界経済に遠い中山間地においては急速な過疎化が進行しており、特に子ども達の数は減少し、全校数十人という中学が多数ある。すると小中学校が廃止されて、村は急速に過疎化する。これはやむをえない事なのであろうか。

かつての長野県の山間地では子どもが数人の集落であっても分校などの名で小学校を維持し、学校を核とした地域が維持されていた。戦後の復興もそうした教育の力によって支えられて来たといってもよい。環境教育を(1977年以來)永らく行ってきてわかったことは、様々な環境問題を紹介し地球の危機を訴えても個人の行動にはなかなかつながらない、心と体の成長期である小学生ほど環境に関心が高く、また危機感を持っていること、の2点である。とすれば、子どもは地域の中で遊び、大人はその中で地域の課題を提示するという共育の仕組みを再構築するしかないのではないかと思う。近年、子どもたちの体験が重視されるようになってきたが、単に自然に触れさせるだけではなく、自然体験を地域課題として社会化することが大切である。小学生でも現地でギフチョウを見てその素晴らしさに感激するとともにその環境や地域が開発や過疎といった社会関係の中にあることを見出し、自分たちに何ができるかを考え始める事例がでてきている。中学年以上になれば自然や環境を論理的に見る力もあり、地域や自然を様々な関連の総体として認識できるようになります。そこでは、自然も社会も文化もみな関連していることを直感的に理解できるようになっているのでしょう。野外での体験は、理科的な自然観察に終わるものではなく、確実に地域の課題学習につなげることができる優れた教材です。地域の自然を個々の自然物として見るだけではなく、その自然が育んできた地域の暮らしと文化、そして地域の歴史、さらに人類が歩んできた進化の過程まで大きな歴史の流れとして、過去を学ぶことが、未来にどんな地域を創造してゆくのかの知恵と工夫の源泉になるのだと思います。2017.1.5



新たな持続可能な文化の生成について

設楽清和（日本パーマカルチャーセンター）

パーマカルチャーとは持続可能な生活をベースにしながら地域コミュニティとそこに生じる文化を生成していくことを目指しています。グローバリゼーションによって地域の文化は自然と共に破壊され、人は自らのアイデンティティの拠り所と、生活の安定を失ってしまいました。地域の特性とそこに生きる人々の地域の資源を用いて生活のレベルを高めていく創造力により築かれてきた文化の街を見直し、それらが内包する様々な知恵や技術を未来に向けて生かしていくことが、これから私たちが取り組むべきことであると考えます。パーマカルチャーを通して見いだすことができるこれらの文化の様々な特性を明らかにすると共に、これらを生かして地域づくりを行っていく実践についての報告を行いたいと思います。



境界のまち「藤野」の社会的な価値

高橋靖典（トランジション藤野・農業生産法人 藤野倶楽部）

藤野は首都圏からみると、車でも電車でも約1時間-1時間半。都内で仕事を持っていても、なんとか通勤ができる場所に位置しています。地形としては中山間地域であり、平地の少ない山間の地域で、大規模な農業をするには不利な場所です。移住や経済という視点からこの地域を見た場合には、本当に奥まった田舎までは移住できないケースで、消費地でもある首都圏とのつながりも持った上で暮らせるエリア、自然の多い田舎エリアへの境界線のまちとも言えるのではないかと考えています。そんなまちで考えられる役割と取り組みについてお話しさせていただきます。

藤野現地ツアー案内



小山宮佳江 (NPO 法人トランジション・ジャパン共同代表/トランジション藤野メンバー)



末村成生 (トランジションタウン藤野お百姓クラブ)

ポスター

P-1 雑穀街道を FAO 世界農業遺産に

雑穀街道研究班

国連教育科学文化機関 UNESCO に認定登録するような大自然や文化遺産はないかもしれませんが、ここには麦・雑穀をはじめ、イモ・マメ・野菜などの栽培植物の在来品種がよく保存され、また伝統的な山村農耕技術が保全されており、生物文化多様性がとても高いのです。これらの食材が山里の暮らしを支え、健康長寿で世界的に知られました。

この伝統的知識体系から学び、未来の暮らしを素のままの美しいものにしていきましょう。

国連食糧農業機関 FAO の世界農業遺産の認定を受ける活動にご賛同くださり、呼びかけ人になってください。

雑穀街道

Hirai Straße



雑穀を栽培する生物文化多様性が豊かな地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から相模川水系の上野原市、相模原市緑区藤野までをつなぐ道を、雑穀街道と呼ぶ。

P-2 山地農耕を未来へ継承

木俣美樹男（植物と人々の博物館／日本村塾研究員塾生）

関東山地の村々の主作物は、冬でも陽当たりの良いムギジで栽培するオオムギ（表作）でした。オオムギは梅雨期の直前に熟すので、コムギのように収穫遅れで、梅雨期にかかり穂発芽することが少ないからと 40 年前に古老から聞きました。

初夏に黄金色に熟す麦類は冬雨・夏乾燥の地中海農耕文化の主要な作物です。日本に伝播してもその性質は変わらないので、麦秋は梅雨入り頃の季語です。しかし、現在、麦類の栽培は減少し、このために死語寸前の麦秋を伝統的な知識や技能により再現しました。オオムギの収穫後は、コンニャク、ヒエ、モロコシ、トウモロコシ、ササゲ、アズキ、ダイズを作付しました。一方で、冬に陽当たりが悪い畑ハルマジは、春になってからジャガイモ、夏ソバの後に、ハクサイ、ダイコン、トウモロコシ、ダイズ、または雑穀類や陸稲を作付しました。

山間地の谷間の畑は、太陽が傾くと陰になり、とりわけ冬の時期には日照時間が少ないのです。そこで、畑はできる限り陽当たりが良い南向きの山腹に作り、人家は谷間に造ることが多いです。真冬には、室内でも水が凍ります。家族の食べ物を作ることが優先されていたのです。

P-3 インド・ウッタラーカンド州のパンチャーヤト林における森林利用とローカル・ガバナンス

Forest Use and Local Governance of Van Panchayat in Uttarakhand, India

長濱和代 Kazuyo Nagahama* 斎藤馨 Kaoru Saito (東京大学大学院 The University of Tokyo),
ランディープ・ラクワル Randeep Rakwal (筑波大学 University of Tsukuba)

*nagahama@nenv.k.u-tokyo.ac.jp

1. 目的

北インドのウッタラーカンド (Uttarakhand, 以下 UK) 州では、1930 年代に森林パンチャーヤト (*Van Panchayat*, 以下 VP) ¹ と呼ばれる住民組織による森林管理が制度化された。VP は、地域住民の森林資源の利用における草の根的運動の成果であり、住民自身が森林管理への参加主体となる成功例とされている (Agrawal 2005 他)。他方では、VP の多くが既に人口増加や森林劣化等の変化の影響を受けたことや、1970 年代以降の州政府の圧力により、住民組織による森林管理が衰退したという指摘もあり (Balloni et al. 2007 他)、住民が積極的に地域の森林を管理するという体制が揺らいでいると考えられる。本研究では、①植民地期における森林政策の展開とともに、VP が創出した過程を明らかにし、②VP における森林利用と管理、および VP 林 ² の利用の実際、および複数の村落における地域の森林管理および住民の意識について調べる。最終的な本研究の目的は、森林資源利用管理への住民参加と持続可能性について分析することによって、地域における持続可能な森林ガバナンスのモデル案を提案することである。

2. 方法

インド政府直轄の森林研究所 (Forest Research Institute)、および UK 州の森林局 (Uttarakhand Forest Department) において、資料収集による文献調査を行った。また複数の村落において半構造的インタビュー調査を実施した。さらに同じ村落において、ビッターリッヒ法 (定角測定法) ³ により各村落の VP 林の材積量と樹種の同定から森林資源の持続性を分析した。

3. 結果および考察

インドでは、19 世紀半ばから林地の国有化が開始され、地域住民の森林利用は森林管理の障害物と位置づけられてきた。UK 州ではイギリスの植民地支配の下で、1910~1920 年代にかけて行われた大面積の国有林の設定に対し、地域住民からの大規模な抵抗が勃発したため、1920 年代半ばに、州政府は Class I 林 (オークなどの商業的価値の低い広葉樹林) として分類した林地を森林局の管轄から除外して規制を緩め、枝打ちや放牧など地域住民の利用を可能にした。VP は住民による森林管理に関する自治機関として 1920 年代から形成されていたことが確認できた。インドの大部分の地域では国有林は森林局に管理されており、VP 制度は地域住民の管理権が許可された画期的制度であるが、その後の法改正において規制が強化されており、政府側による直接的管理による支配と保全を重視する動向があるといえる。

住民の森林管理への参加に関しては、村落レベルでの規則が比較的多い村落 (K 村) において、毎月の会合が開かれ、全世帯が参加していた。また *Chokidar* と呼ばれている森林管理人が雇用され、林地の開放期間外利用や他の村落民の利用において、罰金を課すなどの規制が存在した。別の村落 (D 村) との比較から、会合への住民参加割合が高いほど、村の規則も明確に規定され

¹ 村落パンチャーヤトとは異なる。

¹ VP の構成員である村落住民が管理する権利を有する。総面積は 5,310km²(UFD 2011)で、州の国有林面積の約 16%を占める。

¹ 1947 年にオーストリアの W. Bitterlich により考案された森林調査方法。対象林分に多数の点を落として、各点で視準・カウントし、その平均値に断面積定数を掛けて、対象林分における ha 当たりの胸高断面積合計を求める。(森林林業百科事典 2001)

ていた。またいずれの調査地においても高い割合で薪が燃料として利用され、世帯当たりの年間平均の薪材利用量は 3,000kg~4,000kg に達しており、森林資源の活用は住民の生活において不可欠であるといえる。森林資源の管理において、村落レベルでの細やかな規則の存在とその遵守が、持続的な資源管理を促していると考えられる。

P-4 Incredible Edible Todmorden and Irouzaki - A Comparative Case Study in Edible Landscape **驚きの食べられる街トッドモーデンと石廊崎： 食用風景を通してコミュニティ中心の持続可能な開発**

Sofia M. Penabaz-Wiley. (千葉大学大学院園芸学研究科博士課程)

The Incredible Edible (IE) movement, an edible urban greening system, began in Todmorden, England and is attributed to improving the socioeconomic situation there over the past eight years. This presentation attempts to find what is different between Todmorden before IE, and the current Todmorden. It also shows the trend of IE over that period of time in other places. Methodology includes interviews, literature review, and trend analysis. Results show that the people in the previously depressed zone of Todmorden desired change, but were concerned with the prospective effort it might take, and also of going against the wishes of the government and community. They also do not even have much hope that change could happen, and did not know how to change the situation. Methodology and keywords used in the IE system are discussed, and are based upon a few basic ideas to create a sustainable community system, including kindness, proactiveness in not asking permission to improve the town, using signs, and combining key stakeholders in the community through the continual growing and sharing of free food, and events based upon those. Coinciding with mass media expressions of these improvements, the movement has crossed borders in particular intervals of time. Currently there are estimated to be over 700 towns worldwide that conduct activities attributed to the Incredible Edible Network.

食用都市型緑化システムであるの「驚く食べられる町」のインクレジブル・エジブル (IE) は英国の小さなトッドモーデン市で始まり、8年間で社会経済的状況の改善に起因しています。このプレゼンテーションでは、IEの以前のトッドモーデンと、現在のトッドモーデンの間で異なることを精査します。また、他町でのその8年間のIEの傾向を示します。方法論は：インタビュー、文献レビュー、傾向分析が含まれます。結果は、過去の経済的に不況地帯のトッドモーデン市民達が変化を望んでいたが、それが取る可能性のある将来の努力に関係しており、また政府と地域社会の希望に反することに心配をしていました。彼らはまた、変化が起きる可能性があまりないと思っていたし、状況をどのように変えるかも知らなかった。街を改善するための許可を求めないこと、例えば、看板を使用しないこと、地域社会の主要な利害関係者を組み合わせることなど、持続可能なシステムを構築するためのいくつかの基本的な考え方に基づいています。継続的な成長と自由に食用植物や漢方用植物を採集出来るの共有、そしてそれに基づく出来事を含めています。これらの改善のマスメディア表現と合わせて、ムーブメントの成長は時間で増えています。現在、IEネットワークに起因する活動を行う世界中の700以上の町があると推定されています。